

アリエル

第171号

クリスマスメッセージ特集

インマヌエル

——東の国の博士から

「『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」「マタイ・二三

ヨセフの夢の中で、主の天使はこのように告げました。

もし人がわたしたちに質問して「キリスト教とはどういう信仰か」「聖書は一言で言うとなんか書いてあるのか」と尋ねたら、このように答えれば良いと思います。

「インマヌエル、『神はわたしたちと共におられる』ということが書いてあるのです。」

二〇二一年一月二日

発行人 井田 泉

〒六〇四―八四〇三 京都市中京区聚楽廻中町四五

<http://blog.livedoor.jp/izaya/>

インマヌエルということを書いて浮かべるために、先週二回子どもたち（聖三一幼稚園、信愛保育園）にした東の国の博士のお話をします。

イエスさまがお生まれになったころ、遠い東の国に星のことを研究している三人の博士たちがいました。

博士たちは毎日毎日夜の空を見ていたのですが、ある夜、これまでに見たことのない不思議な星が西の空に輝きました。次の夜、博士が西の空を見ると、やっぱりその星が輝いています。不思議に赤く輝いています。その次の夜も、やっぱりその星は光っていて、何かお話ししているようです。

これは何かがあるに違いない。博士たちはいろいろ本を調べてみました。するととても大切なことがわかりました。あの星は、世界中の人を幸せにしてくださいさるほん

「それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

ヨハネ一・一四

どうの王さまがお生まれになったことを教えていてくれるのだ。

その頃の王さまはたいがい皆、いばつていて、人をいじめたり困らせたりしていました。けれども新しくお生まれになった王さまはそうではなく、皆を守ってくれるほんとうの王さまです。

次の夜、また星を見ました。するとその星は「行きましよう」「行きましよう」「きつと会える」「きつと会える」「お生まれになったその王さまにきつと会える」とお話ししているようでした。

その方を見たい、会いたい、拝みたい。三人の博士たちは決心しました。新しくお生まれになったその王さまを拝みに行く。プレゼントに大事な宝物を用意して、ラクダに乗って出かけました。遠い遠い道

を何日も何十日も砂漠を旅して出かけました。星を目指して進みました。

道が分からなくなったとき、星が教えてくれました。

そうして星に導かれて、ベツレヘムの馬小屋の飼い葉桶の中に、赤ちゃんを見つけました。イエスさまです。

赤ちゃんから不思議な光がさしています。とてもやわらかな、明るい光。博士さんたちはとてもしあわせな気持ちになりました。

博士たちは三つの宝物を持って来ました。黄金、乳香、没薬です。

黄金は王さまのしるし。「イエスさま、大きくなったらあなたがほんとうの王さまになってわたしたちを守ってください」

乳香はお祈りのしるし。「イエスさま、どうかわたしたちのお祈りを聞いてください」

没薬はお薬です。「イエスさま、おなか

てください。」

イエスさまにお会いできて、博士たちはとても幸せで胸がいっぱいになりました。そうして、喜びながら東の国に帰って行きました。

大きな星が導いてくれてよかった。これからはイエスさまが星になって導いてくださいます。

——— だいたいこんなお話を子どもたちにしたのですが、この東の国の博士たちは、「インマヌエル」（神はわたしたちと共におられる）ということをはっきり経験したのです。

イエスさまに直接会う前、星を見た。星の呼びかけを聞き、心を動かされた。旅立たずにはいられなかった。これはすでに神が共におられて、彼らを招いておられた、彼らを引き寄せられた、ということ。

博士たちはイエスさまにお会いした。喜びに溢れてイエスさまを捧いだ。どんなにうれしかったことでしょう。これは直接のインマヌエルです。神の子イエスを見て捧いだとき、博士たちはインマヌエルの事実

に満たされていきました。

博士たちは東の国に帰って行きます。けれども彼らの心の中に、イエスは留まり続ける。イエスさまにお会いした彼らはもうそのことから離れません。

イエスさまに直接会う前、直接お会いしたとき、お会いした後。三重のインマヌエルの経験です。

わたしたちをイエスは招かれました。御言葉と祈りの中で神はわたしたちに出会われます。わたしたちは洗礼と聖餐においてイエスさまと直接お会いします。洗礼、聖餐を受けた後、イエスはわたしたちの中に留まり続けてくださいます。

そのインマヌエルの事実を、このクリスマスに新しく知ることができましように。
(二〇一〇・一二・一九 京都聖三一教会)



ベツレヘムへの旅

ルカ二・一―七

「ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。」ルカ二・四

イエスさま誕生の直前のことを、ルカ福音書は短くこのように伝えていきます。けれどもこの一行余りの事柄の中に、実はとても大きな困難と切なる祈りがあったのではないのでしょうか。

ガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムはほぼ真南。直線距離にして約一一〇キロメートルだそうです。京都からすると南の方、奈良、天理、橿原を過ぎて五條、下市、吉野あたりの見当です。

けれども直線距離を旅したわけではありません。そのころ、北のガリラヤと南のユダヤを往復するのに、多くの人々はその中間にあるサマリアを避けて東へと迂回する

ことが多かったそうです。「ユダヤ人はサマリア人とは交際しない」と聖書のある箇所にかかれているとおりです（ヨハネ四・九）。

マリヤとヨセフが暮らしていたのはガリラヤのナザレ。ここは海拔約四〇〇メートルで高原のようなところでした。ローマ皇帝の横暴な命令によって、もう臨月になろうとする身重のマリヤとヨセフは、ユダヤのベツレヘムに行かなくてはなりません。

サマリアを通らず、東へと迂回する道をたどったとすると、まずガリラヤの湖のほとりに出ます。ここが海面下二〇〇メートル。東へと旅したただけではなく高低差六〇〇メートルも道を下ったのです。それからヨルダン川にそってまっすぐ南へと下っていきます。また五〇メートルくらい下ることになります。エリコという町を経由して今度は西南へと山道を上っていきます。ベツレヘムはエルサレムのさらに南。海面下二五〇メートルのヨルダン川付近から海拔八〇〇メートルくらいの山の町ベツレヘムまで、一〇〇〇メートル以上の高低差。おんなに大変だったことでしょうか。オ

オカミに遭うかもしれません。強盗に襲われるかもしれません。十分な装備もなく護衛のチームがあるわけでもなく、貧しい二人にはお金も十分にあったとは思えません。途中でどんな危ういことになるかもしれません。

けれども二人には、別のものがありました。た。

神の約束です。

「あなたは身ごもって男の子を産む。生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。」

ルカ一・三一、三五

この約束に命がけて頼っています。

二人には決意と祈りがありました。

「お言葉どおり、この身に成りますように。」ルカ一・三八

神の救いがやがて生まれようとするこの子をとおして実現する。絶対に実現する。そのために二人は自分を献げる決意です。

「主よ、お守りください。わたしたちを守り導いてくださるのはただ神さまおひとりです。どんなことがあっても、主が約束されたことが実現します。わたしをおし

て、わたしたちをおして。」

マリアとヨセフの決意と祈りは空しくはならず、神の約束が実現しました。

「彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼ひ葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」ルカ二・六―七

神の命がこうしてわたしたちの間に現れ出しました。

マリアがヨセフとともに歩んだ厳しい旅。非常な労苦と献げた祈り。この厳しい道のりをおして、神の子はわたしたちのところにおいでになりました。

人々の祈りと労苦に守られてお生まれになった救い主イエスさまは、わたしたちの祈りと労苦の中においでになり、生きて働いてくださいます。

(二〇一〇・一二二四 京都聖三一教会)



「その出来事を

見ようではないか」

ルカ二・八―二〇

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」二・一―

「救い主の誕生の知らせを最初に聞いたのは、ベツレヘム近くの野原の羊飼いでした。」

ところで羊飼いなというのはどういう人たちだったのでしょうか。

第一に、羊を守り育てるために苦勞する人たちです。苦勞があり、危険があり、命をかけてする仕事です。雨、風にさらされ、日照りに遭い、羊のけがや病気の面倒も見ながら、草と水を求めて移動します。一つ間違えば、羊の群ればかりか自分たちの命も危険にさらされます。

第二に、町の裕福な人々からは軽んじら

れていた、軽蔑されていた人たちです。羊飼いたちは裕福な人たちからは、「貧しい」「荒っぽい」「きたない」「くさい」と言われて見下げられていました。

しかし第三に、羊飼いは祈っていた人たちです。

「主はわたしの羊飼い、わたしには何も欠けることがない。」

(「主はわが牧者なり われ乏(とも)しきことあらじ」) 詩編二三・一

これは羊飼いたちの労苦の中から生まれてきた祈りに違いありません。

「主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。」二三・二

「死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。」

あなたがわたしと共にいてくださる。」二三・四

預言書にも羊飼いの祈りと思えるものがあります。

「あなたの杖をもって

御自分の民を牧してください

あなたの嗣業である羊の群れを。
彼らが豊かな牧場の森に

ただひとり守られて住み

遠い昔のように、バシヤンとギレアドで

草をはむことができるように。」

ミカ七・一四

これらは羊を守っていた羊飼いであればこそ献げることのできた祈りではないでしょう。漫然と過していたのではない。羊飼いたちは切に祈り求めつつ生きていた人々です。

ベツレヘムの野原で、ある夜、特別な出来事が起こります。

「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。

『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたも、布にくるまって飼う葉桶の中

に寝ている乳飲み子を見つけられるであろう。これがあなたがたへのしるしである。』

すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。』」

ルカ二・八―一四

天使たちが天に去ったとき、羊飼いたちは互いに言います。

「さあ、ベツレヘムへ行こう。主がわたしたちに知らせてくださったその出来事を見ようではないか。」二・一五

新共同訳聖書には「わたしたちに」がありませんが、原文にははっきり「主がわたしたちに知らせてくださった」と書いてあります。

「主がわたしたちに」

この、苦勞してきた人たち、軽んじられてきた人たち、しかし祈っていたこの人たちに、主がその出来事を知らせてくださったのです。

羊飼いたちはベツレヘムを目指して行きます。そして飼う葉桶の中にその乳飲み子

を発見します。天使が知らせてくれたとおりでした。

飼う葉桶に眠る幼子は、神が人となって来られた方。

実はこの方が、羊飼いたちを待っておられたのです。

わたしたちも今、ベツレヘムの野原にいます。

わたしたちも天使の知らせを聞きました。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」

遠い昔の物語にしておかず、わたしたちもベツレヘムに行きましょう。

チャンセル（聖所）の奥、聖餐のレールは恵みの座。わたしたちのための飼う葉桶です。そこでわたしたちも救い主にお会いし、尊いいのちをいただくのです。

羊飼いたちを待つておられた主は、そこでわたしたちを待つておられます。

(二〇一〇・一二二五 京都聖三一教会)

言は肉となつて

「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。」ヨハネ一・一四節

ヨハネ福音書の冒頭は不思議な言葉の連続です。哲学的な表現が並んでいて、頭で理解しようとしてなかなかわかつた気がしないことがあります。

けれども今日は「言(ことば)」と訳された言葉(原語は「ロゴス」)を、一節から一四節までたどつてみることにします。特に「言」が主語になっているところに注目してみましよう。

1. 「初めに言があつた」一節

世界の初め、宇宙の原初に、言があつた。歴史が始まる前、その言が響いて世界が造られていきました。創世記の最初、

「光あれ」という神の言葉を思い起こします。まず「初めに言があつた」。これが第一です。

その言には命があり、光があつて、人間を照らしています。

2. 「言は、自分の民のところに来た」一節

その最初にあつた言(ロゴス)はじつと動かないのではありません。「自分の民のところに来た」。物体が何かの拍子で動いたというわけではありません。みずから意志を持つて、決意して、自分の民のところに来た。本来、人間はこの言、この存在、この方が生きて働かれたからこそ、存在しているのです。しかし「民は受け入れなかつた」。

3. しかしこの世界の拒絶、人間の拒絶に言(ロゴス)はひるまない。積極的に働きます。だれも何者も、けつして与えることのできないものを人に与えたのです。

「しかし、言は、自分を受け入れた人、そ

の名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」。一二節

人を神の子とする。言は人をとらえて神の子とする。呼びかけられて、愛を注がれて、人は自分からもその方を呼び、自分からもその方を愛する。高ぶることからも救われ、自分を卑下することからも解放されて、人々は自分が神の子であることを喜ぶ。神との間に幸せな交流が起こり、清められた命が充滿する。自分が神の愛してくださつている子どもであることを知り、経験することは何という幸福でしょうか。言は、人々を神の子とすることです。これが第三です。

4. 「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。」一四節

言はただわたしたちに接近しただけではなく、わたしたちに呼びかけるだけではなく、「肉となつた」。神である方が人間となつたのです。そして遠い別のところではなく、わたしたちの間に宿られた。わたしたちと一緒にいとされるのです。これが第四、第五です。

「肉」は生命活動を行うわたしたち人間からだ、肉体です。あるときは元気に力を発揮するけれど、あるときは深く傷つく。破れ、弱り、やがて息を引き取って朽ちていく。この悲しい人としての実体、ありよう、現実を、言はみずからのものとして引き受けた。

わたしたちと一緒にいようとしてみずから人間となり、肉となった方は、その生涯をベツレヘムの飼い葉桶の中に始められました。

「言」は、第一に「初めにあった」、第二に「ご自分の民のところに来た」、第三に「信じる者を神の子とした」、第四に「肉となった」、第五に「わたしたちの間に宿った」。

これがヨハネ福音書冒頭に記された神の言の働きです。

ずっとそう書いてあるから「言」と言ってきたのですが、この「言」とはキリストのことです。キリストは最初からおられて、わたしたちは元々このキリストに属す

るものなのです。けれども人間が背き、逆らって神から遠ざかっていったので、この方はわたしたちを迎えに来られました。そして拒絶にあいつつも人々を呼び、招き続け、自分を受け入れた人々を神の子としていわれます。

そして究極的なことが起こりました。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」一・一四

肉となった言、人となられた神。これがイエス・キリストです。

神の言は人となり、肉となったから、人の痛みを自分も痛み、人が病んでいるから自らも痛み、人が苦しんで関係が破れ心も破れているからこの方の心も破れ、汗と涙と血を流して歩んで行かれます。

自ら痛んでわたしたちをやらわげようとし、自ら病んでわたしたちを癒そうと、みずから破れて人の破れを結び合わせようとされる。

反抗する者たちの怒り、憎しみ、迫害をご自身に引き受けて、この方は十字架への道を歩まれます。

この方の誕生、この方の存在を曇らない目で見た人は思わず声を上げました。

「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」ヨハネ一・一四

イエス・キリストの中に神の恵みと真理が充滿しています。充滿はそれを見る者、それに触れる者に恵みと真理をもたらします。充滿がわたしたちに押し寄せて来ます。充滿は広がっていきます。神の恵みと真理の充滿の中で、癒しと救いと新生が起こります。

この年の最後の主日に、神の言の受肉―神の恵みと真理の充滿の出来事を聞きました。新しい年に、そのことをより深く知り、経験することができましように。

(二〇一〇・一二・二六 京都聖三一教会)



♪ バッハ「わたしはあなたを呼ぶ」

つい最近、あるコンサートでJ・S・バッハ「わたしはあなたの名を呼ぶ」をピアノで聞く機会がありました。バッハのコーラル前奏曲 BWV 639 のケンプによる編曲版です。深い祈りの曲でした。

バッハがヨハン・アグリコラ（一四九四〜一五六六）の詩にもとづいて作曲したものだそうです。詩に関心が起こったので訳してみました。

わたしはあなたを呼びます、

主イエス・キリストよ

わたしの嘆き求めを聞き入れてください。

この時にわたしに恵みを与えてください。

わたしをくじけさせないでください。

正しい信仰を、主よ、わたしは思います。

それをあなたはわたしに与えようと望んで

おられます。

あなたのために生き、

わたしの隣に益となり、

あなたのみ言葉をまっすぐに保つために。



Ich ruf zu dir, Herr Jesu Christ,
ich bitt, erhör mein Klagen;
Verleih mir Gnad zu dieser Frist,
laß mich doch nicht verzagen;
den rechten Glauben, Herr,
ich mein,
den wollest du mir geben,
dir zu leben,
dem Nächsten nüt zu sein,
dein Wort zu halten eben.

詩は一五三〇頃と言われるので、まさに宗教改革の時代です。ルターが大切にしたコーラルのひとつとして、礼拝で会衆が一緒に歌ったことが想像されます。

- あけましておめでとうございます。新しい年、主の恵みと真理に生かされる年でありますように。大晦日の夜に思い立って編集を始めました。
- 昨年は京都聖三一教会礼拝堂聖別八〇周年記念の年でした。古い木造の礼拝堂が今も生きてわたしたちを生かしてくれていることが感謝です。
- 昨年は尹東柱について講演する機会が二度ありました。一度は下京消防

署の職員人権研修、もう一度は浦学院大学の後期アセンブリ。パワーポイントを使いながら話す経験でした。

- 司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』がNHKでドラマ化され、話題を呼んでいます。問題は、司馬氏が「日本は維新によって自立の道を選んでしまった以上、すでにそのときから他国（朝鮮）の迷惑の上においておのれの国の自立をたまたねばならなかった」などと言って、「迷惑」（戦争、植民地支配。文化、歴史、言語等の剥奪）を受けた側の視点を欠落させていることです。これについては聖公会生野センターの『ウルリム』第五三号に少し書きました。わたしのブログにも掲載しています。
- わたしが編集責任者になつている『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ』を今年こそは大きく進展させなくてはなりません。
- 一年前に還暦を過ぎ、残された人生で何ができるか、何をすべきか、を思います。自由の霊、真理の霊、恵みの霊、知恵の霊……を求めます。

E-mail izaya@da2.so-net.ne.jp